谷　多分、全員に配っていたんだと思いますね。
伊藤　大学が学生に配っているんじゃないですか。
谷　そうですね。アメリカ人の学生でも田舎から来ている学生が大勢いますし、その頃はアメリカの田舎はまだ安全だったですから。
奥田　僕は谷さんが行ったペンシルベニア大学という所に、それは既に1985年でしたが、それでも…。
谷　ドクターで行かれた時ですね。
奥田　それで、一番最初に会った人が何か注意事をした時に、地図をぱっぱっぱっと手書きして、「ここからここまでの範囲がセーフティーゾーンだ。ここから外は絶対にお前一人では…」と言ったのは、何か頼りなげな日本人と見られたこともあるけれども、でも、そういう感じですよね。そこから外へ一人で行って何かあったって、それはもうお前の責任だということでしょうね。
伊藤　私も実はペンシルバニア大に行っていました。比較的安全だということでしたが、私の頃は相当危なかったですね。91年から93年に大学院に行っていたのですが、その時の論文もやはり犯罪を対象とした大学のセキュリティの話がありまして、御存知のようにペン大というのは市の西側の余り安全じゃない所にある無防備な大学ですから、どこからでも誰でも入れるという状況なのですが、その過去5年間の学校の中で通報された犯罪がどこで起こっているか、どんなものが起こっているかというキャンパスのセキュリティの研究をやっていたのですけれども、大学の中で1日に通報が100件位あるんです。（「ホォー」と驚きの声あり）しかも、ユニバーシティ・ポリスという大学の私設警察みたいなものがありながら、とにかく100件位の通報があるんです。その中には、パソコンを取られたとか、車の窓を割られて中の物を取られたとか、そういうのも色々ありますし、レイプだって1日5、6件（「へェー」）、毎日のようにあるんです。これらは記録を調べると本当に驚くべきものなのです。
　それらをマッピングしてみると、やっぱり危ない所とそうでない所がよくわかるので、私なんかはそういうのが専門なので、歩く時余計に神経質になってしまって、奥田先生が都市で生活するコストとおっしゃっていましたけれども、私は東京とか色々な都市でもそれは十分あると思います。近頃、東京でも目が合っただけで殴られたとか、電車の中でだってそうですから、これはもう本当にアメリカだけの話ではなくなってきていると思うんです。
谷　日本人だけではないでしょうけど、日本人というのは見ればわかるんだそうです、犯罪者から無防備だというのが。そういうふうに言われました。正に周りに目配りがないと言いますか、特に数人で歩いていると、全く無防備状態のようですね。
恒松　と言うことは、そういう社会で成長しているからなんですね。
谷　そうなんですね。
恒松　だけど、常に危ない所で生活しているんだという意識を持つことが、いいことなのでしょうかね。
谷　良いか悪いかという判断からすれば、良くないでしょうね。だけど、社会がだんだん安全になっていくという保証は全くないです。どちらかと言うと逆ですよね。その時にどうすべきかと言うと、まず一義的には個人が自分の身を守るということが、国際化時代には避けて通れないのではないかという気がするんですね。
東郷　ここのところ恐いのは、犯罪の検挙率が急激に落ちているんですね。
恒松　私はあれを見て、急激に落ちているのは確かに問題なんだけれども、それは犯罪が多過ぎるんじゃないかと思うのですがね。
東郷　多過ぎるのと、それから、今の外国人犯罪の分が余計対応し切れないのかな。
恒松　対応し切れていないのですかね。
東郷　検挙率がまた一段と悪いですね。
恒松　検挙率が悪いんですよ、この間、何か統計に出ていましたけどね。
東郷　この間、一般検挙率が20%位まで落ちている。それで外国人関係がまたさらにですよね。
吉川　都市に住むコストというものをどのくらいに認めるかというのが、正しく都市に住む人達の文化なり価値観だと思うんですが、アメリカはもうそういうものだとして、ずっと子供の頃から育ってきているし、例えば、僕も初めて改めて見たけど、今でもシェリフというポストがあるわけで、カウンティーの中にはシェリフというのがちゃんと選ばれているわけだから、いわば昔の保安官の仕組みが未だに残っている国というのは、やっぱり自分で自分を守るという国ですよね。

日本が安全だ安全だと言われていて、それで経済成長したから良かったと言うのは、実はたまたまそういう環境の時代が戦後の50年から70年位まであったというだけであって、それから本当に国際化して、最後は一人一人が競争するという社会になる。そうすると、例えばアメリカなどで見た時に、逞しさを感じるのは中国人とか、あるいはベトナム人などですよね。あのようにして裸一貫で来ても、中国人というのは世界中どこへ行っても港町には中国人が威張っているので、本当に一人になっても、あるいは家族さえいれば、もう3日もすると、英語をしゃべってタクシー運転手をやっているなんていうのが、中国人とかアフガン系の人にはいますよね。そういう逞しさを持っている人が、最後は何だかんだ言っても国際人になっていけるのではないかなと思うのです。

日本が余りにも安全な社会だと言ったために、その意識が外国人が東京で仕事をする時に日本人の感覚にどうも合わない。それは言葉の問題もさりながら、日本人のそのような余りにもセーフティーネットとか言って、周りの環境が安全を守ってくれるという感覚がビジネスに合わないとか、多分そういうのがあって、日本から外国の会社へ離れたりする。また逆に日本人の人達も、かつてみたいに、叩かれた時にひ弱だから、最近外国に行く人も大幅に減ってしまいましたね。

それは最後は個人の逞しさに行くのは、どのくらいのコストまで自分でという意識を持てるかという問題、それが結局は国際化の時代の、なれるかどうかの物差しになっていっているような気がするんです。そういう点では非常に日本の将来が心配ですよね。

セーフティーネットという言葉は響きはいいのですけれども、裏を返せば、周りが何とかして下さいよということの裏返しですからね。

谷　アメリカなんかだと、福祉だとかセーフティーネットなんていう考え方も、もう自助努力はし尽くしたけれども、どうしてもそこから落ちてしまう人を拾うというような観念があるでしょう。テナメントハウジングなんかの話でも、パブリックハウジングはもうやめちゃったと、そこまでは全部自助努力でやりなさい、それでもどうしても落っこちてくるホームレスだとかそういう人は、何とか救いましょうと言うのですが、日本はそうではなくて、その前で救っちゃうでしょう、努力する前に。それがやっぱり日本国民を駄目にしていくんじゃないかという気がしてならないですけどね。

だから、非常に報道なんかを聞いていてもおかしいと思うのは、確かに犯罪にあった人は気の毒だし、ケアされなければいけないけれども、でも犯罪のあう状況に、自ら好んでではないけども、陥ったという人も随分いるわけですね。そういうところをきちっと言わないと、また同じ犯罪に色々な人が陥るわけですよね。だから、どうすれば犯罪から逃れられるかということをもうちょっと主眼にして、報道すべきだと思うんですね。

昨今、面白いことを言ったら誰も答えられなかったんですけれども、どなたか知っていたら答えて下さい。国立大学で試験問題の採点を誤って落ちた人がいますが、かわいそうだからといって入学させていますね。間違って入っちゃった人はいないんですかね（笑い）。

吉川　同じ数だけいるってことだ（笑い）。

谷　同じ数だけいるはずで、その人達はどうするんですかね。

事務局　それが書いてありましたよ。間違って入学したのじゃないかと疑心暗鬼に思っている人もいると。

谷　いると書いてありましたか。私の見る限りの報道では、全然触れていなかったですね、テレビとか新聞とか。

恒松　私は見なかったんですけど、入ったのがいるはずだとそれは私は思っていましたよ。いいことはそのままなんですよ（笑い）。入った受験生にとっては恵まれたわけですから、それは言わないんですよ。おっしゃる通りだと思いますよ。

東郷　日本というのは有難い国で、入ってしまえばみんな自動的に出るのが大学ですからね（笑い）。だから、あり方論から言えば、間違って入ったのは卒業ができないというのが筋だという感じがするんです。

恒松　これはしかし大変な問題ですね。

谷　とにかく、ここに名前にも付けましたけど、“基礎調査”なんですね。これで完結しようなんていうことは思っていませんから、先鞭をつけるというような、余りにも議論されていないという感じがしますので…。

東郷　さっき伊藤さんからお話があったように、さもなければやはり括られた方が、これだけの期間、研究費でやるのですから、その方がいいと思います。

伊藤　先程、吉川さんからお話があったように、今、この谷さんの参考資料の企画では、市民は安全に対してどう考えているのかを調査すると書いてありますけれども、これはあくまでも生活者の立場でどう思うかということを調査するわけですね。
谷　一般の人がどのへんを本当に不安に思っているのかというのを、ちょっと調べてみましょうか。
恒松　長いこと生きてきたけれども、こういう問題で不安に思ったことって余りないんですよ、僕は（笑い）。恵まれていたんですかね。
奥田　そのうち、大きい事故にあいますよ、先生（笑い）。
恒松　もうこの年になって大きな事故にあっても、別にどうってことはないけど、今までそういう不安を感じるということはなかった。
　それが、最近ですよ、初めて…。元来、僕は学校なんていうのは地域社会に開放されるべきだ、それが望ましい姿だと言ってきたんだけれども、いつだったか校庭で女の子が襲われたというような話を聞いて、そういうことはあるかも知れないけど、やっぱり原則としては開放されるべきだと言い続けてきたんだけれど、この間の池田小学校のようなことになると、そうは言っておれないのかなという…。
奥田　開放型にすることが安全だというように考えないといけないので、昔の小学校は入口はガードするけど、一歩中へ入っちゃったら全く無防備地帯になっているんですよね。あの池田小学校でも、ああいう箱型の小学校は、どういうところからつくられたかと言うと…。
恒松　むしろ以前のやつが閉鎖的であって。
奥田　今のような論でいくと、昔ながらのああいう牧歌的な小学校の施設配置とかつくり方自体を、これから変えてもいいかと僕は思うんですけれども…。
だからああいうような使い方をしているから、すぐ統廃合の対象にもなってしまうわけで。
谷　できるだけ沢山の人々の目が色々な場所に注がれるようにするというのも、一つの方法なんですよね。
奥田　本当ですよね、人々の目があったわけですね。
事務局　テレビで見たのですが、あの事件を契機にして、ある田舎の小学校では、教室を開放して父兄の部屋というふうにして、三々五々何時でも家族が来て、生徒の勉強振りを見たり、昼食時は食事やおやつを持ってきていてそこで食べたり、年寄り達も暇な一日を過ごし、和気アイアイの中で子供達を守るという態勢ができているんですね。
恒松　それもいいかも知れないけど、しかし先生にとっては、うっとうしい話ですよね。
事務局　画面では、先生方もその教室に入って来て、冗談言い合って和気アイアイでしたが、今時は、昔もそうだったけれども、先生も悪い奴が多くなっているから…。
恒松　悪い先生もいるし、良い先生もいるんだけれども、全体として、何かそういう父兄が来て四六時中たむろしていて、先生を見ているかどうか知らないけど、いやぁ、うっとうしい話ですよ。
奥田　いや、いいんですよ、先生は少し監視していなくちゃ駄目ですよ（笑い）。
事務局　一人ぽつんと暮らしているばあちゃんが、「家にいるよりか、学校に来るのが楽しみ」と言っていましたね。子供達を通じて地域コミュニティの良き触れ合いみたいなものが育っているようでした。
恒松　それから教育の基本的なところで…、小学校や中学校の校長先生などは、今は大体 2、3 年で代わりますが、私達が教育を受けた頃は、中学校の校長先生などは 8 年か 10 年は校長でいたわけですから、入学した時から卒業するまで同じ校長でした。この違いは学校教育のあり方の中で大変重要だなと、僕は思っているんですけどね。僕は小学校 6 年間に 2 人しか先生が代わりませんでしたよ、3 年までと 4 年から 6 年まで。中学校へ入って卒業しても、なおかつ校長先生はいましたから。
　私は知事をしていた時に、少なくとも高等学校の校長先生は 5 年は 1 つの学校にいろと言ったのですが、そうしたら、それはなかなか難しいことなんですよ。自分より後輩がよりいい学校の校長先生になったりするわけで（笑い）、それは耐えられないことらしいんですよ。良い学校とか悪い学校、そういうのをランク付けするからおかしいのであって、それ自体がおかしいんだと言うと、「わかりました」と一応そうすることになったんだけど、私が辞めてから全然実行されていないですね。あの時は、本当に腹が立って校長と言い合いをしましたけどね、それでいて学校の差別なんかしていないと言うんですよ、口先だけでは。「何を言っちょるか、嘘を言うな」と言って怒ったことがあるんだけど…。
　やっぱりそういうところから問題があるんじゃないですかね。私達が受けた教育が良かったのかどうかはわかりませんけど、少なくとも一応まともな人生を歩んで来ていますから、良かったんだろうと思いま

す。
谷　先程、奥田先生が言われたことは非常に大事だと思ったのは、ああいう池田小学校のような事件が起こると、すぐ、門をしっかりしろだとか、守衛を置けだとか、そういう方向に行くんですけれども、それは短期的には効果があるかも知れないですけど、長期的には余計中を脆弱にしてしまいますね。子供達は守られていると余計無防備になる。それよりも、むしろ開放して、多少のコストは出てきますけれども、色々な人の目が入り、色々な人が逆にいることによって相互監視するという方が、強い社会だと思うんですね。昔だと、例えば街にお年寄りが座って、何にもしないで通りを見ているとか、必ず人の目があったわけですね。今はお年寄りはテレビを見ていますから。

神戸のサカキバラの事件があった時に、あの周辺の住宅地がテレビで映って、「こんな高級な瀟洒な住宅地で、こんなにも悲惨な事件が…」とテレビがコメントしたんですけど、私は逆に、あれを見た途端に、これは人々の目がない、みんな生垣や塀があり門があって、家が全然隠れてしまい危険だなと思って、都市計画の責任というのも重いなと思ったんです。ああいう住宅をつくっちゃったら、泥棒も非常に入りやすいんです。

恒松　入っちゃえば外から見えないですからね。

谷　ですから、逆になるべくオープンにする。そうでないと、あちこちに監視カメラを付けて、それこそ監視社会になっちゃいますからね。

技術的には、もうすぐ衛星から監視できるようになるらしいです。そうすると、車のナンバープレートは天井につけるんだそうです。佐賀のバスジャック事件が起こった時に、バスの天井にナンバーを書くということを金沢美大の先生が提案して採用されたと言って威張っていたらしい。ところが、「スピード」という映画を見たら、ちゃんと上に書いてあった（笑い）。アメリカは前からやっているんです。多分、衛星じゃなくてヘリコプターで追うためでしょうけどね。でも、今は衛星で番号が読もうと思えば読めます。そうすると、犯罪で逃げた車なんかは、たちどころに追跡できちゃうんですね。

それから、非常に悪い奴にそれが渡ると、エシュロンでしたか、アメリカの盗聴システムですが、物凄く恐ろしい、すべて通信が筒抜けなんです。だから、悪い奴でヒトラーみたいなのが掴んじゃったら、大変なことになる。だから、余り技術で解決しようとすると、その先にはもっと怖いことがある。

それで、一番良いのは人の目でコミュニティでというのが一番良いのだ、と思いますけどね。そのへんのことが、この研究で何とか輪郭が出てくると面白いと思うんですけど…。

恒松　そうですね。

谷　何か言い忘れたということがおありでしたら、最後におっしゃって下さい。

吉川　このアンケートというのは、つまり調査員を使ってやるようなイメージで考えているんですか、それともインターネットか何かでやってしまうわけですか。

谷　余り具体的にまだ考えていないんですけども、そんなに沢山はできないと思うんですよ、コストも掛かりますから。

吉川　調査員を使うとお金が掛かってしようがないけど、簡便にはインターネットでやってしまうというのがいいと思いますけどね。

谷　インターネットでやるのが簡単ですよね。

伊藤　インターネットはアンケートとしては偏りますから、やっぱり郵送もいいんじゃないですか。

谷　そのへんに関しては、後で相談させて下さい。

それでは、今日はそういうことでよろしいでしょうか。今後共よろしくお願い致します。